

## 『アルツハイマー病と腸内フローラ』

胡旭, 王涛, 金鋒

中国科学院心理研究所, 中国科学院心理健康重点实验室, 北京 100101

2016-01-27 收稿、2016-04-08 接受

### 【要旨】

アルツハイマー病は中枢神経系が衰える珍しくない病気で、主な症状は認知機能の損傷である。腸内フローラは、微生物-腸-脳軸を通じて宿主の脳の機能と行動(認知行動を含む)を調節する。宿主の無菌状態、抗生物質の干渉、善玉菌の関与、飲食習慣等はすべて腸内フローラの構成や腸の生理的機能に影響し、同時に宿主の認知行動にも影響を及ぼして、宿主のアルツハイマー病罹患リスクを左右する。腸内フローラが乱れると、腸の浸透性や血液脳関門の透過性が増し、神経の退行性病変リスクが増す。腸内フローラの代謝産物とその代謝産物が宿主の神経に与える生化学的影響も、アルツハイマー病のリスクを左右する。また、病原微生物に感染すると、アルツハイマー病の発症リスクが増し、同時にアルツハイマー病の発症は「衛生仮説」(乳幼児期の衛生環境が個体の免疫系の発達に影響を及ぼすという仮説)を裏付けている。これらすべての結果が、アルツハイマー病が腸に由来し、腸内フローラの乱れと密に関係している可能性を示唆している。カスタマイズされた飲食や善玉菌の関与によって腸内フローラのバランスを調整することが、アルツハイマー病の新たな治療法となるかも知れない。